

書評 林 敏彦著

『続 経済学者の手帖 ～不況と震災を越えて～』 NTT出版

本書は過去7年間に於いて発表された70編の時事的エッセイの中から、厳選された30編によって構成されているエッセイ集である。当然のことながら、所謂“ガチガチ”の理論書ではないし、経済理論入門シリーズでもない。タイトルから容易に理解できる通り、現代社会や経済問題に対する随想録と言ってよい。但し、ホンモノの経済学者が、平易な表現方法をもって、不況や震災復興といった危機・苦難に対し、経済メカニズムや市場機構論ではなく、「懸命に生きた人々の横顔を描くこと(原文)」によって何かを伝えようとしている事に重要な意味があるのである。

まず、第一章において平成不況というものを1930年代のアメリカと比較した上で、不況それ自身の功罪を認めつつも、不況になる事で萌芽してくる新たなエネルギーの存在を指摘している。また、平成不況といった言葉で全ての地域が同系列に捉えられがちな経済状況を、「パブルに縁のなかった地方では、今回の不況は普通の不況」と鋭く指摘する着眼は、現実的な経済の姿を正確に描写しており注目すべき点であろう。

二章の阪神大震災においては、関西で活躍する経済学者(=著者)ならではのリアルな震災体験に基づいた生の神戸が描かれている。そして第三章においては郵政事業を例として、規制緩和と官僚の実態・法整備の必要性を唱えた上で、日本版PFIの醸成と大学を中心とす

る政策提言ネットワーク整備が急務であると主張する。

これらの議論を提示した上で、日本経済再生のシナリオを最終章において提示しており、国家(または東京)主導型の画一的なITシフト化よりも、むしろ各都市が「ごちゃまぜ」に多様化を競い、それらが生産・流通(マネーも含めて)・人々の交流に至るまで、高度かつ緩やかな電子ネットワークによって結びついている情報都市像こそが様々なダイナミズムを生み出す鍵である、と納得させられるのである。

我が師でもある著者の好んで使う言葉の一つに、“Warm Heart and Cool Head”という言葉がある。出来の悪い弟子達に対し、現実の経済を扱う研究者たる者としての心構えを問うた言葉であり、また同時に、経済という不可解な生き物に対する著者自身の真摯な姿勢であろう。そして、この姿勢は本書においても見事に貫かれており、鋭い観察眼と提言をもって、不況と復興にあえぐ神戸・そして日本を温かく見守ろうとしているのである。

本書に敢えて注文をつけるとするならば、各種のトピックが一貫した流れの中に配置されておらず、パッチワーク的に散在している感否めない点にある。但し、個別に書かれたエッセイの編纂という出版方式をとった以上、これを期待するのは酷な面がある。いずれにせよ、経済に関心はあるものの、「経済学はイマイチわからない」という方にこそ是非手にとって頂きたい良書であるし、また、専門家が読んでも考えさせられる点の多い含蓄豊かな書である事も間違いないと信ずる。新井圭太(高崎経済大学経済学部講師、計量経済学)

デボラ・グッドウィンさん

長期休暇で母校を訪ねた、元オーストラリア留学生

デヴィさんはメルボルン出身。スウィンバーン大学でビジネスマーケティングと日本語を学んだ後、日本の文部省奨学金試験に合格し、95年、1年間の交換留学生として来日した。メルボルン仕込みの日本語力を発揮しようと息巻いていたが、待っていたのは関西弁との戦い。「日本にきてみたら全然ちゃう言葉やった!」と当時を振り返る。

関西外国語大学での交換留学終了後、OSIPPの研究生に。半年後博士前期課程に正規入学し、高阪章教授の指導を受けた。初めて見る専門用語にてこずりながらも2年間経済学を学び、世界各国の公益企業がその国の成長率に与える影響を分析した。

日本の学生が質問しない中、「私も恥ずかしくなって講義中は質問しなかった」デヴィさんは、実は講義後「お散歩ついでに」先生たちのも

とをよく訪ねていたという努力家。日本の寒さは苦手で「寒い日は極力、家から出ないようにして」勉強していたそうだ。

99年3月の修了後、「いつかは博士号を取りたいが、まずそのための勉強を」と考え、就職の道を選んだ。生まれ故郷に戻って、現在は「楽しく、厳しく」仕事をしているという。

久しぶりに訪れたOSIPPでは、教官や同級生たちと再会。「私、日本語めっちゃ忘れてるやん」と変わらない関西弁で笑顔を振りまいていた。

「日本語 メッチャ忘れてるやん!」

はじけるような関西弁を操るデボラ(デヴィ)・グッドウィンさんは約2年半ぶりの日本でロングバケーションを過ごした。現在はオーストラリア統計局(Australian Bureau of Statistics)に勤務している。

卒業生近況